

## 【コースの目標と履修の流れ】

### ○ ピアノ コース

ピアノ演奏の基本の技術を身につけ、自発的な自分自身の演奏ができるように4年間を通し、創造的表現を追求します。

必須科目は基本的な音楽への理解を深めるように考えられ、なおかつピアノ演奏への理解を深めるようなカリキュラムと共に、選択科目には、ピアノ指導者としての基本的な知識とテクニックを身につけられるようなカリキュラムが工夫されています。

一年次ではバロック時代のポリフォニーへの理解を深め、多声・ハーモニーと調性感の理解、古典派のソナタを通して分析能力を高め、ソナタ形式の理解と楽章の個性への理解を深めます。

二年次では **Beethoven** のソナタを演奏することで、一年次に学んだハーモニー感、レガート奏法、カンタービレ奏法、フレージング、ペダルの演奏効果等を確認します。そして楽器の発達により、ピアノによる音楽表現が豊かになり、発想そのものも変化してきたロマン派の楽曲を演奏することで、音色の探求と表現力の豊かさを求めます。

三年次ではレパートリーの拡大を計り、秋の学内演奏会では演奏パフォーマンスにて、自分の可能性を探し、演奏する喜びを見つけられるように努めます。また、**Chopin** の練習曲に取り組むことで、再度自分の技術的問題点を明確にし、音色の探求を勉強します。前奏曲 **op.28** に取り組み、楽曲の性格を理解し、調性の特徴の理解と自分の演奏スタイルを探ります。

四年次では将来の進路に合わせて、更にレパートリーの拡大と演奏能力の向上、ピアニストとしての自分の問題点を明確にし、楽曲へのアプローチの方法、練習方法等、音楽家としての自立の道を修得します。

一年・二年次成績優秀者には、専攻生の為の演奏会出演が二年・三年次にあります。その為に、実技試験と別途、オーディションがあります。四年次には定期演奏会出演ができます。出演者はオーディションにより選出されます。これらに加えて、二年次から「オーケストラとソリストのタベ」出演のオーディションが受けられます。

副専攻受講者も基本的に同様の実技試験課題、オーディションの参加が認められています。

### ○ 管楽 コース

大学で音楽を学ぶ時、4年間通して次の項目をしっかりと認識して、卒業後の目標としてください。①各自の専攻する楽器をコントロールする事を目指してください。アンブシュアや呼吸法・フィンガリング等基本を学び、自由に楽曲を演奏する力を養ってください。②アンサンブル力を身につけましょう。ソナタ等小さな編成から吹奏楽やオーケストラ等の大きな編成まで、それぞれの中で調和できる力をつけましょう。③音楽史や楽曲分析能力を養ってください。

音楽の構造を理解せずして美しい表現は無いからです。これらの項目をしっかりとチェックして日々の学習をより具体的に効率良く修得してください。

### ○ 弦楽 コース

弦楽器は古くから、打楽器・声楽に次いで音楽史の重要な部分を占めています。

ギターやハープなどの、撥弦楽器は、弦の振動という物理的な現象を芸術の領域に高めることにより、永きにわたって発展してきました。

ヴァイオリン・ヴィオラ・チェロ・コントラバスといった弓を用いる擦弦楽器は、おおよそ 16 ～ 17 世紀にかけて飛躍的に発達し、多くの楽曲がこれらの楽器の使用を想定して作られ始めました。

とはいえ、これらの楽器のための作品の大半は 18 ～ 19 世紀に作曲され、それらは今日にいたるまで定番のレパートリーとして、世界中の演奏家や聴衆に愛されています。

当コースは学生諸君がこういった名作に真摯に取り組み、正しい表現者となるために基礎的な修練を積み重ね、楽曲を理解するための分析を怠ることなく、試験などにおいて日頃の学習の成果を最大限に発揮することを目標としています。

加えて、弦楽器には非常に多くの独奏曲が存在しますが、同時に室内楽・合奏・オーケストラなどの幅広い分野にわたって活躍する楽器です。様々な授業において、よく聴きよく表現する方法を会得しましょう。

適切な音律に基づくピッチコントロール・作品の時代背景に合った音量バランスやアーティキュレーション、特に擦弦楽器においては右半身の動きそのものが、正しいフレージングや正しい演奏の鍵を握る最大の要素です。

その正しい音程の獲得や、自在に楽器を操るための、姿勢・体づくりに注意をはらうことも大切です。

すべての演奏形態に言えることですが、指・手足を動かすだけでなく、耳や脳を使って自分の音をしっかり分析し、そのデータを次なる修練につなげていくことが、熟達のポイントです。

## ○ 打楽 コース

打楽器の歴史は古く、叩くものは全て打楽器として分類されています。現代音楽の分野では、特に、その傾向は強くみられます。

大学においては、その中でも大きく鍵盤打楽器（マリimbaを中心に、ヴィブラフォン、その他）と、スネアドラム、ティンパニ等の太鼓類を中心に基本奏法の研究、技術向上をはかります。

マリimbaは、ソロ楽器としての歴史は浅いですが、テクニックの向上、音色の追求、知識や教養を身につけること、感性を磨くこと等々、さまざまな経験を通して、豊かな表現力を身につけ、夢を大きく持ち、スケールの大きなマリimbistとして成長する事を目指します。

スネアドラム、ティンパニなどの太鼓類は、オーケストラや吹奏楽など様々なところで、主要のパートとして存在します。この中で演奏できる基本的な技術を養い、色々な形態の音楽、また、マルチパーカッションのソロの演奏表現を通し、基礎力、表現力のある打楽器奏者になる事を目指します。

打楽器は、古くから世界各地に分布し、多くの民族打楽器が存在します。特にインドネシアのガムランは、ラヴェル、ドビュッシー、ステイーブ・ライヒ等、多くの欧米の作曲家に多大な影響を与えています。名古屋音楽大学では、30 年以上前からガムランの研究、演奏に取り組んでいます。西洋音楽とは全く異なる楽譜や、音階からなるガムランを演奏体験する事により、より高度なアンサンブル、リズム感を養います。

## ○ 邦楽 コース

近代箏曲の祖である八橋検校から現代迄の 400 年間に伝承されて来た数々の作品。その作品を中心に研鑽を積む事によって、世界に誇れる日本音楽、特に古典の世界を知らしめ、卒業後は演

奏家として、指導者として生きて行ける事を最も大切な目標とするものです。その研鑽方法は独特であり、古典から現代曲迄、独奏曲あり、二重奏曲あり、三曲合奏あり多重奏あり、その形態には、地唄箏曲独自の世界である異種の楽器、箏と尺八、箏と三絃、箏と胡弓、箏同士、三絃同士等。アンサンブルとしては演者のみならず聴衆にとっても楽しみ方が多彩である事が特徴的です。古典的な三曲合奏が、地唄箏曲の最終形態になっています。その三つの楽器について、いかに精通するかが、演奏家としても指導者としても必須条件になります。当コースに於ては箏、三絃、尺八の実技があり、各々専門以外に副科として他楽器を学習出来ます。例えば邦楽コースの箏専攻を選べば三絃は関連実技として必須科目であり、尺八は副科で学ぶことが出来ます。それによって三曲合奏や他楽器との二重奏曲の理解を深く得られる事をもう一つの目標としています。(履修の流れ)

1年次の箏は、八橋検校の代表作である「みだれ」、宮城道雄の代表作の一つ「春の夜」に始まります。三絃は初心者には宮城道雄の「小曲集」より始めます。経験者には小規模の「手事物」と称される文化文政時代の作品を主として習得します。

2年次の箏は、中程度の「手事物」を中心に指導します。三絃も同じ中程度の「手事物」によって、特に唄に拘って指導します。

3年次の箏は、宮城作品によって器楽曲を中心として技術の向上を目指します。三絃も宮城作品を主にして、古典とは違う奏法に挑戦します。また、学内演奏に向けて、独奏曲、あるいは三曲合奏に対応します。

4年次は卒業までに習得すべき曲をなるべく多く経験させる事に重きを置きます。三絃も同じく、特に唄物を多くし、唄い方発声法を完成します。

院生は秘曲、稀曲にまで踏み込みます。特に箏組歌は必須です。この学びにより修了後の演奏活動に資するものであります。

## ○ 声楽 コース

声楽家として、身体も声も成熟するのは、むしろ卒業してから後の年代だと思われれます。ゆえに、10代後半から20代前半にかけての時期はその先につながる大変重要な時です。

正しい呼吸法による自然な発声という基本的な技術の習得、向上と共に、さまざまな経験を通して、豊かな表現力を身につけることが求められます。

声楽コースでは、表現するために必要とされる専門的な授業が多く用意されています。

2年次には「オペラ基礎演習Ⅰ・Ⅱ」で、バレエ、日本舞踊、着付け、コンテンポラリーダンス、演技などを順次経験し、それらをふまえてオペラの演習に入ってゆきます。

また、同時に「歌曲基礎演習Ⅰ・Ⅱ」では、日本、フランス、ドイツ、イタリアの歌曲を順次歌唱研究します。各国の原語に触れることにより、幅広い感覚を養うことができます。

そして、それらを3・4年次に「オペラ実習」「歌曲実習」という形でさらに深めていって、最終的には、「オペラ公演」「歌曲演奏会」という集大成で表現します。少なくともどちらか一方では実習Ⅳまで履修し、出演することが望ましいのですが、近年では喜ばしいことに意欲的な学生が増えていて、両方に出演する人が非常に多くなっています。

この他にも、「合唱」「重唱」等の演奏し、研究する授業と、「音声生理学」「音声病理学」のように、自分の身体を楽器とする声楽コースには重要な、身体構造及び機能を学び、発声を科学的に研究する授業も開かれています。

このように、幅広く経験し、研究していくことで、未来には美しい花が開くことを信じていま

す。

## ○ミュージカル コース

「ミュージカル」という専門分野を学ぶ事で舞台人としての感性を磨き、総合的な舞台芸術に必要な力を身に付けます。多様な個性を認め合い、時代を生きていく力をつけ、自分の個性を磨き、伸ばし、成長させる事で、その力を地域や社会貢献にも活かす事を学びます。

「ミュージカル」に必要な要素であるダンス・歌・演技のテクニックや表現を実践的な授業展開の中で学び、その成果を発表する機会を通して、充実感や達成感を体験し、創造する力を高めます。また、人間力向上にも力を注ぎ、未来を志向する感性豊かで人に感動を与えられるアーティストを育成します。

(履修の流れ)

総合舞台芸術の一つ「ミュージカル」は歌・ダンス・演技の3つの要素が必要とされ、実践的な授業展開の中でそのテクニックと表現を学びます。

個人レッスンは【ヴォーカル】のレッスン以外に個性を大切に伸ばすカリキュラムとして、1年・2年生は【舞台表現基礎研究】があり、個々にミュージカルのドラマ作りの基礎を学び、3年・4年生で【舞台表現研究】に発展し、レッスン時間も増え、ドラマ作りを深めると共に、照明・音響を使用し、学内発表・卒業発表で個人レッスンの成果を発表する場へとつながります。

また、【ミュージカルⅠ～Ⅷ】は1年生から一つのミュージカルの作品に取り組む事ができるカリキュラムで学内外での成果発表の場を持ち、それぞれの学年で学んだ技術や表現を発揮できる機会でもあり、ミュージカルに欠かせないアンサンブルを学ぶ機会となっている事が大きな特色となっています。

さらに個性と創造性を引き出すために、専門分野以外の様々な知識や理論を学べます。

卒業認定後は学士(音楽)の学位が授与されます。また、他コースとの交流や舞台に必要なマナーを身に付ける事により、人間力向上にも力を注ぎ、舞台人としての成長と育成を目指すコースです。

## ○ 舞踊・演劇・ミュージカル コース

演劇、ミュージカル・各種舞踊(クラシックバレエ・コンテンポラリーダンス・日本舞踊)のステージ表現者となるためには、専門知識と基礎理論を学び、表現技術の向上を計ることが重要である。

本コースでは、学生ひとりひとりの可能性を幅広く、深く花ひらかせるために基礎理論と実技の両面からの指導を行い、学外・学内での企画プロデュース公演を通し、劇場内での本番経験にて研鑽を積み、将来プロフェッショナルとして通用する人材の育成を目標とする。

(必修科目とコース目標との関連性について)

### ①「歌唱研究」

個人レッスンにて自分の声を探し、育てること、息の流れ、発音を学ぶことができる。

### ②「舞踊実習」

バレエ、コンテンポラリーダンス、日本舞踊の実技を基礎から学ぶことができる。

### ③「演技・演出実習」

演劇作品の構成、人間関係を知り、演技術を修得することができる。

④「ミュージカル歌唱法」

ミュージカルの重要素である歌唱表現を修得することができる。

⑤「ミュージカル表現法」

ミュージカルに多用されることの多いジャズダンスを学ぶことができる。

⑥「ミュージカル」

今までに修得した歌唱、ダンス、演技を総合してミュージカル作品を創ることができる。

⑦「舞踊・演劇研究」

個人レッスン。作品の構成、役柄の心理を学び、個性を生かした、パフォーマンス作品を構成・企画し、学内発表・卒業発表作品をつくることができる。

⑧「合唱」

ミュージカル作品、演劇作品に必要な合唱技術を学ぶことができる。

⑨「ソルフェージュ」

音楽にかかわる仕事をする時大切なソルフェージュ（聴音能力）を学ぶことができる。

⑩「西洋音楽史」

今日に至るまでの音楽の歴史を学ぶことができる。

⑪「作曲法」

オリジナル曲、ミュージカル作品を創る時に必要な作曲を学ぶことができる。

⑫「器楽実技」

鍵盤・管・弦・打・邦楽器実技より1科目学ぶことができる。

## ○ 作曲 コース

古典から現代までの幅広い音楽作品に触れ、音に対する感受性を高め、創造のために作品を論理的に考察し、独創性、創造力の展開を図ります。

作曲実技ではソロ曲、二重奏曲、歌曲（合唱曲）、室内楽曲が、また卒業作品としてはオーケストラ曲の提出が義務付けられています。また、3年次には学内演奏会で、自作品が演奏されます。提出作品とは別に、年2回、めいおんホールまたはホール Do にて作曲コース主催の試演会を企画しています。卒業時には選考により、愛知県芸術文化センターにて室内楽（大規模なアンサンブルを含む）を発表する機会が与えられます。必修科目の作曲理論では、楽曲解析及び高度な和声、フーガ、管弦楽法の実習が課せられます。また、ソルフェージュ、および外国語や教養科目も必修科目とされています。さらに、映像音楽、コンピュータ・ミュージック等を選択し学ぶことも出来ます。スコアから学ぶことはとても重要ですが、多くのコンサートに積極的に出かけ、演奏家とのコンタクトなどさまざまな音楽のあり方を追求することが望まれます。

各学期毎に作品制作課題を課し、成績評価を行います。強い情熱を持ち、音楽のみならず他の芸術や文化全般について幅広い関心を持ち、品質へのこだわり、そしてより優れたものを目指す飽くなき探究心を持って下さい。

## ○ 電子オルガン コース

（コースの目標）

電子オルガンは、50年ほどの歴史ですが、時代と共に発展し幅広い音楽に対応できる楽器とな

りました。この楽器を勉強するという事は、多くの音楽を学び、表現を試みることとなります。そして、これからさらに発展していく電子オルガン独自の音楽を担っていけるようないろいろな角度から音楽を捉える力が必要となります。

演奏力と創作力を身につけることにより、演奏家、指導者、幅広い柔軟な音楽力を活かした仕事など、これほど大きく枝分かれしていく楽器は無いと思います。それを踏まえ、多角的に学ぶことを目標としています。

学内演奏会や定期演奏会、コンテンポラリーミュージックコンサートなど、多くの演奏の機会があり、ステージで演奏する経験を多く持つことこそが実力に繋がると考えています。

(履修の流れ)

1, 2年次では、ソルフェージュ・作曲法などさまざまな授業を通して、基礎力を身につけ、音楽の幅を広げます。制作演習では、コードプログレッションを理解しポピュラー音楽のアレンジやアドリブが可能となる基礎力を習得します。また、より良いサウンド作りの為にレジストレーション(電子オルガンの音作り)の研究もします。アンサンブルの授業ではリズム感、表現力、バランス感覚を身につけます。演奏研究においても、偏ることなくクラシック曲やポピュラー曲を演奏します。

3年次より、積極的に自編曲に取り組み、創作力を身につけます。自分自身で課題を探すことも大切です。めいおんホールにおける学内演奏会では、演奏者としての演奏力、サウンド作りに対する意識を明確に持つことも必要となります。

4年次は、集大成として自己表現できる楽曲に取り組みます。演奏家や指導者を目指して、具体的に課題に取り組みます。

院生は、音楽を奥深く掘り下げ、自分の可能性、音楽の可能性、楽器の可能性と向き合い発展性のある考え方を身につけ、演奏に活かします。

邦楽やジャズ・ポピュラーまで、多くのコースを持つ音大という恵まれた環境の中で、他楽器とのアンサンブルや、伴奏の機会を活かし多くのことを吸収してもらいます。

## ○ ジャズ・ポピュラー コース

(コースの概要、説明 ジャズとは)

「ジャズ」は 20 世紀初頭のアメリカで産まれた。非常に芸術性が高く、それに付随してきた文化も含めると大きな力を持っていて、継承されるべき演奏方法論、フォーマットを持つ伝統芸能でもある、魅力あふれる音楽です。

なぜジャズはそれほどまでに素晴らしいのか、そしてジャズを学ぶことがどのように有意義なのか? 現存する音楽を、西洋十二音階を使ったものとそうでないものに大きく2分するとします。西洋音階を使わないものの大部分はいわゆる民族音楽です。西洋音階が広まるまで、世界の大部分の地域を占めていたのはこの民族音楽です。そして西洋音階を用いている音楽はさらにクラシックと非クラシックに分けることができます。そして世界中の「非クラシック=ポピュラー音楽」の様々な点において頂点にあるのが「ジャズ」です。

音楽の三大要素である、メロディー、ハーモニー、リズムの各々においてもジャズはかなり複雑で多くの演奏者、研究者により高度な事柄が研究、研磨されてきました。心地よくスイングし最良のサウンドを得る、という大前提の上で、この「スイング(別の言い方をすると、バウンスする、跳ねる)」すること、この独特なリズム、グルーブ感が人々の心を捉えその新興、発展を手助けしたともいえます。

ジャズはその昔、アフリカから新大陸に連れてこられた黒人奴隷（彼らが持っていたスピリチュアルでブルースの発想の元となる民族音楽的な要素）が西洋音階、西洋の楽器を用いることにより、それらがミックスされることにより産まれました。

なぜジャズはこれほどまでに広まったのでしょうか？それは白人文化と黒人文化、幅広い地域の民族（ヨーロッパ、アフリカ、アメリカ）の融合によるところが大きかったからではないでしょうか。ジャズは、世界のそれぞれ地域に根ざした音楽とは違い、最初から混血な文化、芸術なのです。さらに人種、国境の枠を超えて現代に至るまで、発展、変化、多様化しつつ他のジャンルの音楽にも大きな影響を及ぼしてきました。そういうことから「ジャズ」は偉大で全てのポピュラー音楽の長であり、それを学ぶことによって得られる各人の音楽的能力、知識、技能は計り知れず大きく、やりがいのあることです。

ポピュラー曲を演奏します。

3年次より、積極的に自編曲に取り組み、創作力を身につけます。自分自身で課題を探すことも大切です。めいおんホールにおける学内演奏会では、演奏者としての演奏力、サウンド作りに対する意識を明確に持つことも必要となります。

4年次は、集大成として自己表現できる楽曲に取り組みます。演奏家や指導者を目指して、具体的に課題に取り組みます。

院生は、音楽を奥深く掘り下げ、自分の可能性、音楽の可能性、楽器の可能性と向き合い発展性のある考え方を身につけ、演奏に活かします。

邦楽やジャズ・ポピュラーまで、多くのコースを持つ音大という恵まれた環境の中で、他楽器とのアンサンブルや、伴奏の機会を活かし多くのことを吸収してもらいます。

（履修の流れ：カリキュラムの説明）

①1年生時から他コースとも共通の、一般教養科目やソルフェージュなどと平行して、各楽器専攻の「実技レッスン」が始まります。

②そして、ジャズ独自、というよりクラシック的理論を発展、拡大解釈し、ポピュラー音楽の全てを内包する理論系講義である「ジャズハーモニー」「ジャズポピュラーアレンジ」などを履修します。

③そしてそれを実演して身につけるための「ジャズアンサンブル」「ヴォーカルアンサンブル」「ビッグバンド」などの集団での合奏の授業があります。実際にアンサンブルすることによって経験を増やし、ジャズの最大の魅力の一つである「即興演奏、アドリブ、インプロビゼーション」を身につけます。

④ピアノ専攻の学生以外はハーモニー、理論を体系的、素早く目で見て理解しするためにも「ピアノ」を勉強することが最良です。もちろん副科楽器としてピアノ以外の楽器を学ぶことも可能ですし、個々の幅が広がります。これらを履修することにより、各楽器の技術を習得します。

また、音楽の理論、歴史を学ぶ、楽譜を読めるようにして様々な編成で楽曲を演奏出来るようにする、即興演奏、アドリブの内容を研究、吟味していく、既存のスタンダード曲などを編曲したり、新たに作曲したり出来るようにする、こういったことも目標としています。

（最終的な目標）

上記で書かれたような項目を着実にクリアして、技術、知識そして自分以外の人間と音楽、楽器を使い交流（アンサンブル、セッション）することにより応用力、即興能力を身につけます。それによって、素晴らしい技能、個性を持った創造的な音楽家に育つことを目標とします。

元はアフリカからの黒人奴隷がアメリカに渡ることによって産まれたジャズですが、今や世界

中に演奏家がいる芸術です。幅広くジャズを勉強することでグローバルな視野で物事を考えることに出来るようにすることも課題です。

## ○ 音楽教育 コース

(音教コースのねらい)

音楽教育コースには、中学校高等学校教諭第1種免許状(音楽)を取得して教職に就くことを目指す学生、社会の様々な場面で音楽の指導に携わるための力量を磨こうとする学生が学んでいます。したがって、音楽教育コースには、こうした目的に即した「音楽教育について学ぶ」カリキュラム、つまり教育内容と教育課程が用意されています。

音楽教育コースのカリキュラムは、文字通り、音楽の教員や教師に不可欠な広範な知識や技能を修得することが目標となっています。しかも模擬授業などを通じて、それらを具体的に身に付けられるように考えられています。また演習形式の科目を多く配置して、共通のテーマを巡る討論等を通して自分の意見や考えをしっかりと確認し、アピールする力を養う機会を多く設けています。

音楽教育コースのカリキュラムの中心となっているのは、1年次第1期の「音楽教育の課題」に始まり、「卒業論文」あるいは「卒業研究」で終わる一連の必修科目です(各科目の詳細な目的や内容については、シラバスの各科目の項を参照して下さい)。逆に言えば、自分の研究を完成させる「卒業論文」という最終目標に向かって、それ以外のすべての科目は方向付けられている、と考えることもできます。

1年次春学期(第1期)の「音楽教育の課題」は、現在中学校や高校で行われている音楽教育がどのようなものであるのかを認識し、その内容や歴史について学ぶことを目標としています。同秋学期(第2期)の「音楽教育の方法」では、音楽を教育することに伴う具体的な問題、例えば評価や教材について、さらには学校で音楽を教える意義について認識を深めます。

2年次春学期(第3期)には、「音楽学の課題」を履修します。「音楽学」とは、音楽にまつわる様々な現象について考えたり、調査したりすることを通じて音楽について理解を深めることを目的とする研究領域です。音楽を深く理解していることや、その研究の方法を知っていることは、音楽の教育者を目指す上で必要不可欠な知識と考えられます。この「音楽学の課題」では、こうした音楽学について様々な視点から学びます。同秋学期(第4期)には、「音楽学の方法」があります。この科目では、音楽の有り様(ありよう)について調査したり考える方法であるフィールドワークや、楽曲の成り立ちについて明らかにする分析といった音楽の研究の方法について具体的に学びます。

2年次には、これらの科目と平行して音楽教育演習Ⅰ(春学期第3期)とⅡ(秋学期第4期)を履修します。音楽教育演習Ⅰでは、中学校音楽科の教材研究を通して、教科指導の基礎的な知識を習得し、同演習Ⅱでは演習Ⅰでの知識や経験を活かして中学校音楽科の指導法の基礎を演習形式で学ぶこととなります。

3年次春学期(第5期)には、「楽書講読」があります。この科目では、音楽について書かれた文献の講読を通じて音楽について理解し、考える力を養います。同秋学期(第6期)に履修する「音楽学演習」は、いよいよ翌年にせまった最終目標の「卒業論文」あるいは「卒業研究」に向けて本格的な準備を行う科目です。卒業論文と卒業研究では、学生個人個人の関心に応じて研究テーマが設定されるため、この科目も演習形式で行われ、受講生はお互いに自らのテーマについて考えを深め、発表し、議論を繰り返すこととなります。

4年次春学期（第7期）と秋学期（第8期）には、「卒業論文」や「卒業研究」に取り組みます。これらの2つの科目は、名称は異なりますが、どちらも大学での4年間の学習成果をまとめる集大成として、自分の関心に応じた研究を行う、という点では同じです。異なるのは、最終的な研究成果のまとめ方や発表の方法です。「卒業論文」は、文字通り「論文」という形で研究の成果をまとめ、「卒業研究」は、研究成果を教員や他の在学生の前でプレゼンテーションという形で口頭発表します。指導は、どちらの科目の場合にも年間を通じての個人指導となります。指導を担当する教員と研究テーマについて議論し、資料を収集し、最終的にその成果をまとめることとなります。

こうした一連の科目の流れと並行して、専門共通科目と呼ばれる「ソルフェージュⅠ～Ⅳ」「作曲法Ⅰ～Ⅱ」「合唱Ⅰ～Ⅳ」「西洋音楽史」などを1年次と2年次に、「日本音楽の歴史」などの音楽史関連科目を3年次に、「指揮法Ⅰ～Ⅱ」を4年次に学びます。また、共通実技科目として「鍵盤楽器実技Ⅰ～Ⅱ」「声楽実技Ⅰ～Ⅱ」「器楽実技Ⅰ～Ⅱ」を1年次に学びます。

また、中学校高等学校教諭第1種免許状（音楽）を取得して教職を目指す方は、これらと共に、「教育と倫理」「カウンセリング論」「生活指導論」などの「教職に関する科目」を履修し、4年次には3週間にわたる「教育実習」を行うこととなります。

## ○ 音楽療法 コース

（コースの到達目標）

本学は日本音楽療法学会の認定校であり、音楽療法コースのカリキュラムは、日本音楽療法学会が定めた「カリキュラムガイドライン11」に依拠した教育を行います。このカリキュラムガイドラインは、認定校の学生が音楽療法士となるための基礎的な知識、技術を学ぶためのものです。このガイドラインと合わせて、本学の卒業単位124単位を満たす為に、履修学生は音楽分野から32単位、音楽療法分野から30単位、医学・心理学分野から10単位、福祉・教育分野から8単位、語学分野から8単位、その他36単位を履修することになっています。これらの科目を履修し、音楽療法士の筆記試験と面接試験の受験資格を得て、試験に合格して音楽療法士として働くスタートラインに立つための基礎を身につけることが目的です。

（コースが推薦する基礎科目名）

上記に説明したカリキュラムガイドラインにおいて必修となっているもので、本学で履修すべき科目を次に挙げます。

### 【音楽分野】

「音楽の基礎」「音楽学の課題」「作曲法Ⅰ～Ⅱ」「音楽心理学」「日本音楽の歴史」「ソルフェージュⅠ～Ⅳ」「鍵盤楽器実技Ⅰ～Ⅱ」「声楽実技Ⅰ」「声楽実技Ⅱ」「管・弦・打楽器実習Ⅰ～Ⅱ」「合唱Ⅰ～Ⅳ」「リコーダー合奏」「合奏」「指揮法Ⅰ～Ⅱ」「西洋音楽史」「リトミックⅠ～Ⅱ」、その他、音楽分野科目から8単位

### 【音楽療法分野】

「音楽療法総論Ⅰ～Ⅱ」「音楽療法の技法」「音楽療法各論Ⅰ～Ⅲ」「音楽療法の技能Ⅰ～Ⅲ」「音楽療法演習Ⅰ～Ⅱ」「フィールドワーク実習Ⅰ～Ⅵ」「卒業論文」

### 【医学・心理学分野】

「医学概論」「臨床医学各論Ⅰ～Ⅱ」「臨床心理学Ⅰ～Ⅱ」

### 【福祉・教育分野】

「生活と福祉」「発達と学習の心理学」「障害児・者福祉論」または「障害児研究」から1科目、

「介護概論」(カリキュラムガイドライン 11 適用の場合)「教育の基礎と実践」

**【語学分野】**

開講科目から 8 単位 (カリキュラムガイドライン 01 適用の学生は「外書購読 I ~ II」を含む

**【その他】**

卒業単位に含めることのできる全ての科目から 34 単位

(学年ごとの授業内容)

履修は 4 年間 8 期にわたって配分されます。

(1 年次) 1 期 音楽的な技術と知識を身につけるための科目、医学・心理学分野、福祉・教育分野の科目、語学と音楽療法の講義科目が中心。

(1 年次) 2 期 音楽的な技術と知識を身につけるための科目、医学・心理学分野、福祉・教育分野の科目、語学と音楽療法の講義科目が中心。

(2 年次) 3 期 上記の科目の残り、音楽療法の専門科目が増える。

(2 年次) 4 期 上記の科目の残り、音楽療法の専門科目が増える。

(3 年次) 5 期 音楽療法の専門科目が主なものとなり、演習と実習が加わる。

(3 年次) 6 期 音楽療法の専門科目が主なものとなり、演習と実習が加わる。

(4 年次) 7 期 音楽療法の実習と卒業論文、音楽療法士(補)の筆記試験の準備が中心となる。

(4 年次) 8 期 音楽療法の実習と卒業論文、音楽療法士(補)の筆記試験及び面接試験の準備が中心となる。

## ○ 音楽総合 コース

幅広い選択肢の中から自分にあった専攻実技を探し、自分の専攻実技を見つけること。専攻実技が定まった後は、他コース同様、その専門性を極め習得することを一番の目標とします。

必須科目が他コースに比べ少なく設定されている分、自分で何が学びたいのか判断し、選択科目も含めて、合計 124 単位を履修します。

パターン A は 1 年次で既に目標専攻実技が決まっている場合です。専攻実技(レッスン時間 45 分)副科実技(レッスン時間 22 分)を選びます。

パターン B は 1・2 年次に可能性を探る為に将来の目標を自由に探ることが可能です。二つの専攻実技(レッスン時間 30 分ずつ)を選び、3 年次には目標を定めて学びます。学内演奏会に向け、選んだ専攻実技(レッスン時間 45 分)の習熟に努め、副科実技(レッスン時間 22 分)も引き続き学びます。

専攻実技の卒業演奏は他コースと同様です。

他コースに比べ自由に、自分の進度にあったカリキュラムを設定し、幅広く音楽を学ぶことが出来ます。音楽上の独創的なスタイルだけでなく、学び方の独自性も発揮しつつ、判断力、決断力も養成し、音楽全般について修得します。

## ○ 音楽ビジネス コース

音楽業界とは、音楽を商品として扱い、そこで営まれる商業行為を“音楽ビジネス”と定義します。音楽ビジネスコースは、音楽ビジネス界の「仕組み」「成り立ち」「運営」「企画」を理解した上で学生個々の目指す音楽との関わり方を探し、体験し、選択することで、卒業後の進路に確実な方向性を見出し、その志望を成就するための素材と方法を提供することを目標とします。

音楽プロデュース論、音楽マネジメント論（新カリでは音楽ビジネス基礎Ⅰ・Ⅱ）で音楽ビジネス業界の仕組み成り立ちについての基本的な知識を身につけると同時に、商業行為を生業とする社会人としての最低のモラルやマナーについても学んだ上で、実習系の授業を履修していきます。

実習系は、1、「企画・運営系」と2、「スタジオ・録音系」に大別されます。

1、ではステージマネジメント実習Ⅰ～Ⅳが、2、ではスタジオ実習Ⅰ～Ⅳが代表的な実習となります。原則として大学側が実習の場を用意し、シミュレーティブな体験を学生全員に、まんべんなく積ませることで、音楽ビジネスコースで学ぶ学生にとっての基礎学力を固めます。

こうした実習体系により、学生個々の音楽ビジネスにおける志望の方向性がある程度絞られてから3・4年次にインターンシップⅠ～Ⅳが設定されます。学生はインターンシップを通し、身につけた基礎学力が実際の音楽ビジネスの場でどのように役立つかを経験し、自分に足りないものを自覚することになります。そのような“新たに生じた課題”を解決するための技術修得に資するべく設定されるのが公演実習ⅠからⅣになります。

## ○ ピアノ演奏家 コース

ピアノ演奏家として活動できるように、入学前に身につけている音楽への理解や知識をより深め、演奏技術を高め、個性的な自分にしかできない演奏表現を追求します。そのために、毎週60分の通常レッスンと共に、希望する講師、もしくは特別レッスン担当教授による45分のレッスンを月2回、年間15回程度受講します。場合により、月1回90分の可能性があります。

1年次にはポリフォニーへの理解を深めるため、バロック時代の作品（10分以上15分以内）と演奏技術の習得を目指し、エチュードはChopin、Liszt、Prokofiev、Rachmaninov、Debussy、Scriabinより任意の練習曲を学びます。また、古典派への理解を深めるため、Mozart・Haydn・Beethovenのソナタ全楽章、変奏曲、協奏曲全楽章を学びます。（20分以上）

2年次にはロマン派の作品（15分以上20分程度）を組み合わせ自由に。また任意の協奏曲全楽章を学びます。

3年次には学内リサイタル（45分以上60分以内）。近現代の作品（10分以上20分以内）を学びます。

4年次には60分のリサイタル、あるいは30分のリサイタルと協奏曲1曲、あるいは協奏曲2曲を卒業試験とします。

実技試験とは別途、オーディションを受け、選出されれば、専攻生のための演奏会、定期演奏会に出演できます。また、2年次から「オーケストラとソリストの夕べ」出演のオーディションが受けられます。